うみねこ

(サブ:生きる)



(青森県八戸市:蕪島)

2008年

ウミネコはペアーを組み「産卵から自立した若鳥に育て上げる」期間は約2ヶ月間で短い。 最も成長が早い鳥の仲間に入る由。ヒナが大きくなるまでの栄巣中の縄張り争いはし烈だ。 データによれば・・・・1シーズンで2万1干羽の雛が誕生し、うち約1万3千羽が死んだと ある。それは自然界の掟であってそのために成鳥ウミネコの羽数平均が計られているのだ。 私達の観察判断で記したもので若干ストーリー性を持たせて編集したことを申し添えます。





(1) 2月第一群飛来

2007.2.22暖冬で例年より早く飛来した「うみねこ」は蕪島上を飛翔する。例年だと島は積雪しており、 海面よりも地面のほうが数度冷たいために着島しないが、この年は島上に珍しくも3日間降りていた。

2/22~24、蕪島上空を高い鳴き声とともに群れて飛び回るようすである。同じ形ばかりで影が飛び抜けて移動している感さえあった。飛び姿擬視から何もない青空に目を移した時シルエット残像があって驚く。

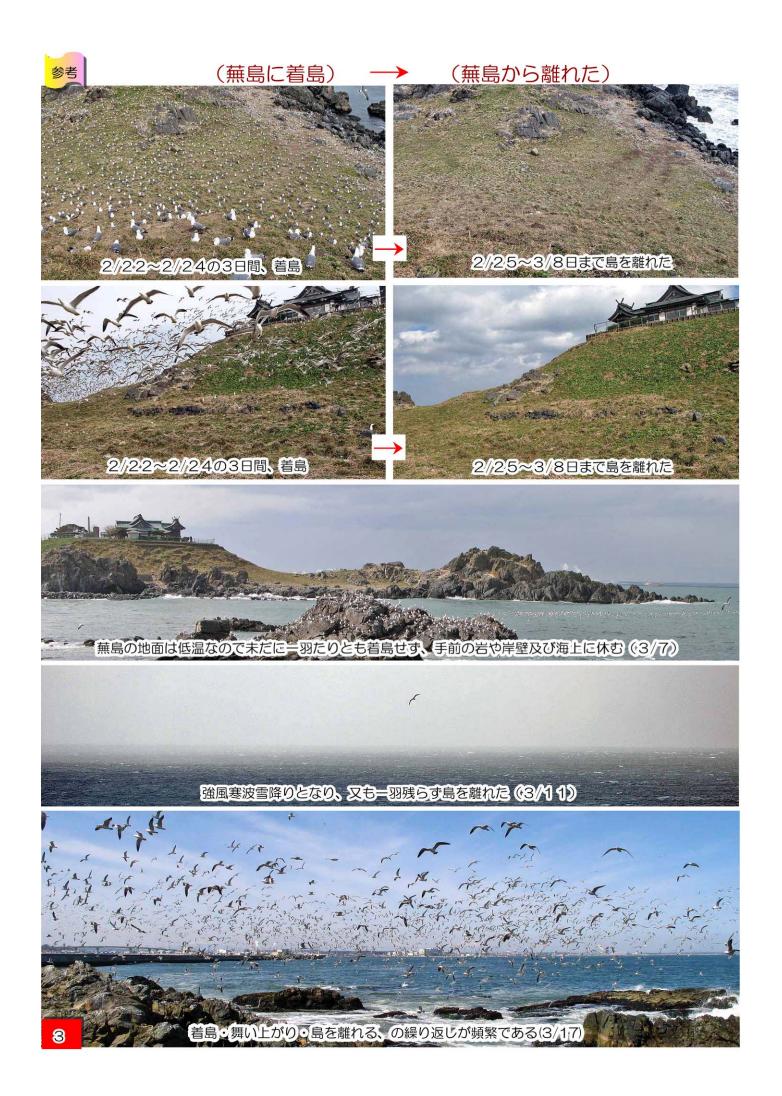


2/25から春の荒れ天気で低温となり3/8まで続く。3/9~3/10気温の急上昇があり再び戻り着島した。だが寒波と一時雪降りで3/11には又も島を離れる。よって島の地面が例年通りの温度になるまで定着無し。

(凡例: ●=着島 · X=離島)

***	2/22	23	24	25	26	27	28	3/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
着島·離島	•	•	•	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	•	•
天候気温	暖	美 気温	=	寒冷低気温											暖気温		
***	3/11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
着島·離島	×	×	×	Δ	×	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•
天候気温	寒冷低気温										暖気温						
***	3/27	28	29	30	31	4/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
着島·離島	•	•	•	•	•	•	•	×	•	•	•	•	•	•	•	•	•
天候気温	暖気温								寒冷	ī	暖気温						

結果:暖冬で7日以上も早い飛来だったが、着島は例年通りになった。





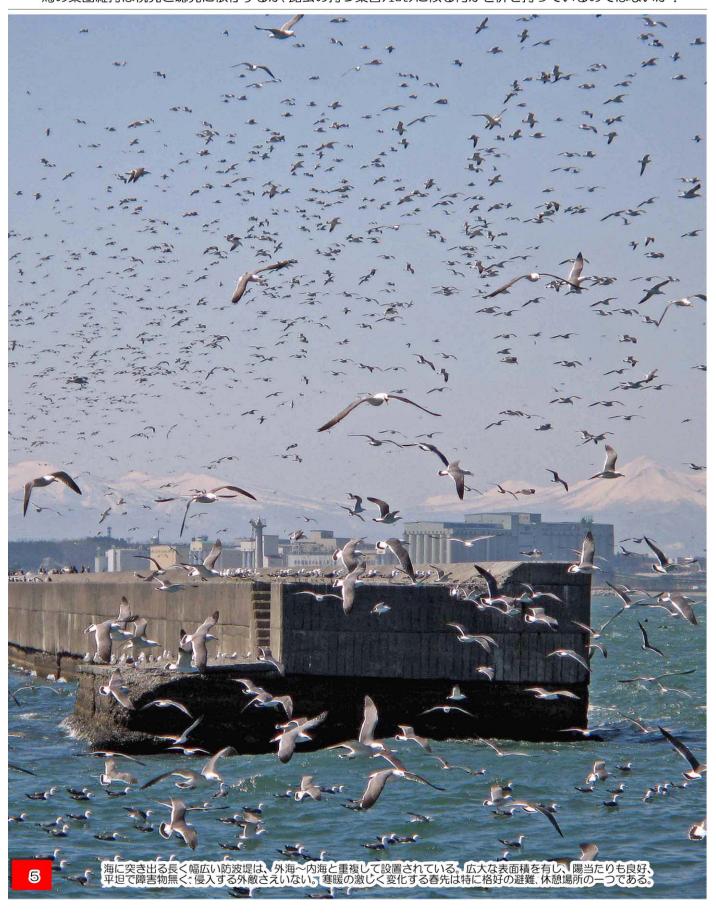






(2) 飛 翔

一斉に島から飛び立つのは狐やイタチ等の天敵に襲われて逃げているのではなくその理由は不明らしい。 産卵前までの群翔集団を大雑把に分けると、島全体で4~5群れあるように思われた。 整然とした、まとまりのある集団として群翔するようすを眺めていると、リーダーがいると考えられる。 鳥の集団維持は視覚と聴覚に依存するが、昆虫の持つ集合フェロモンに似る何かを併せ持っているのではないか?



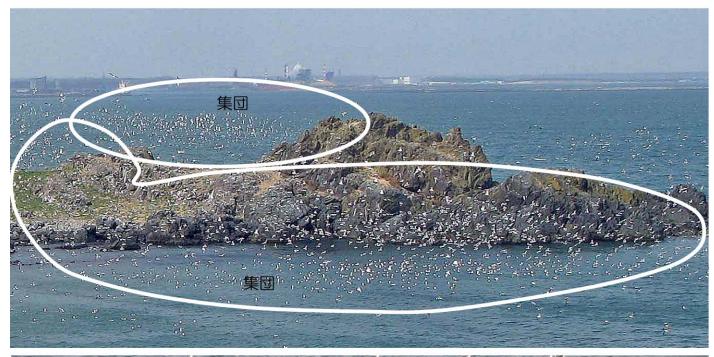






















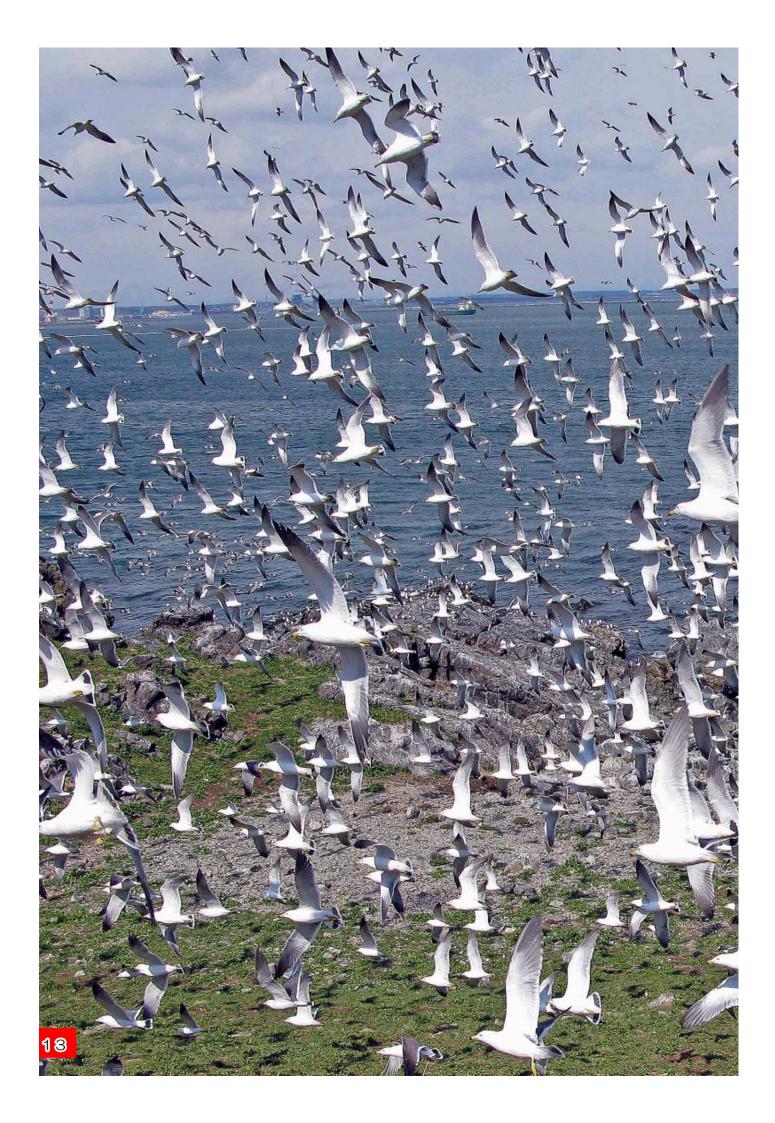


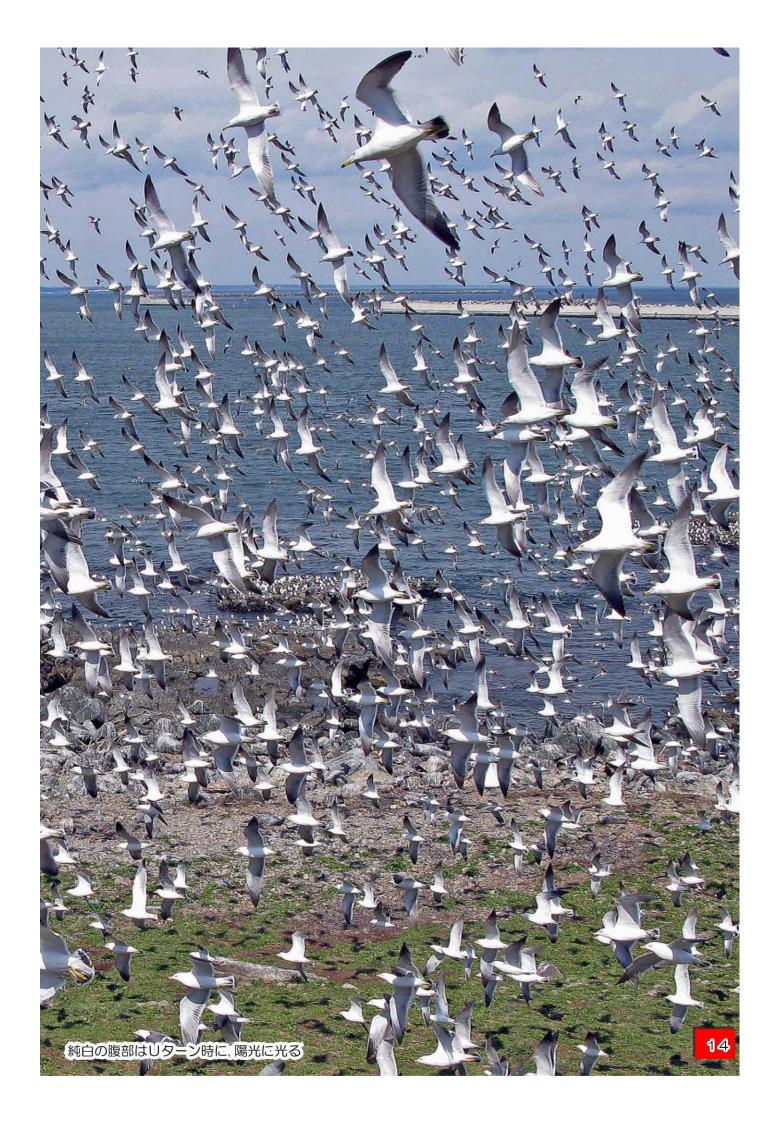


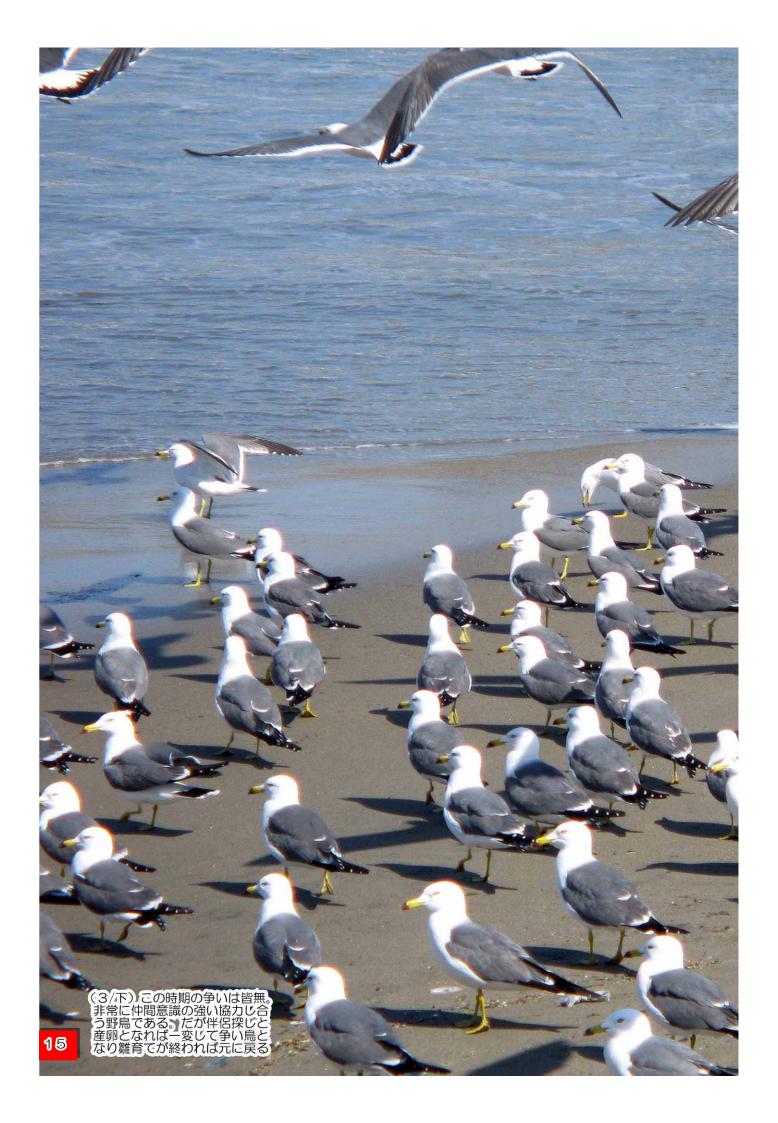


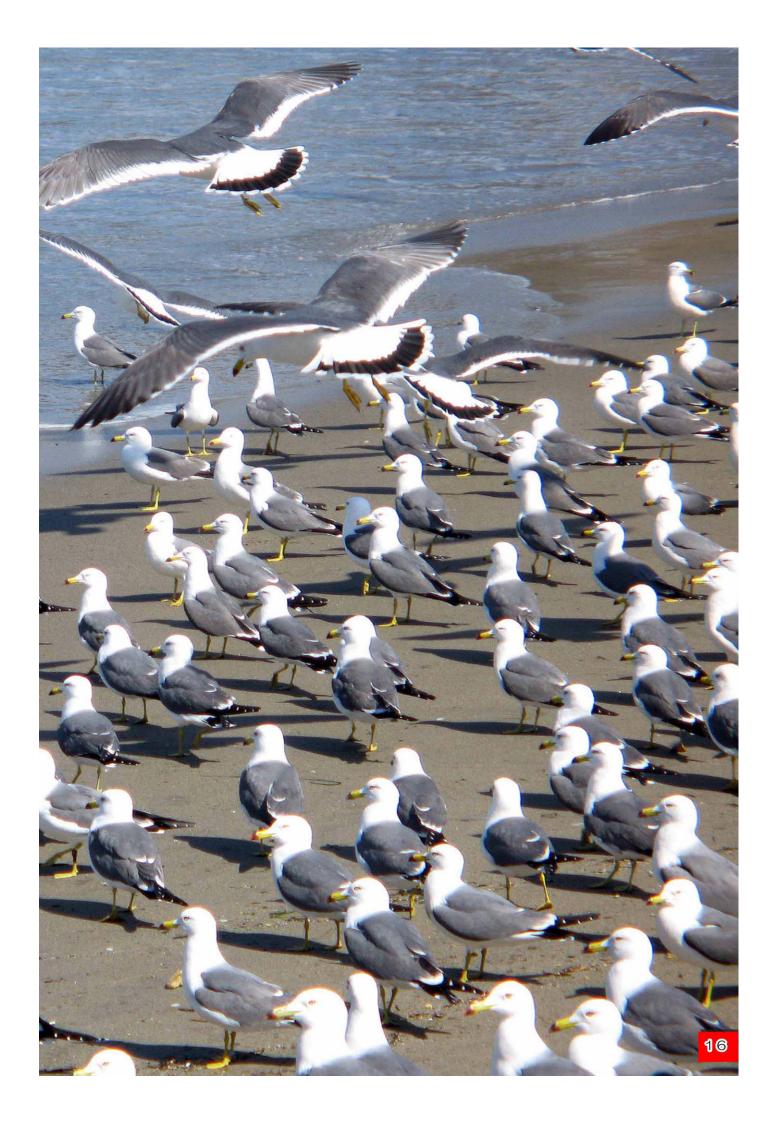


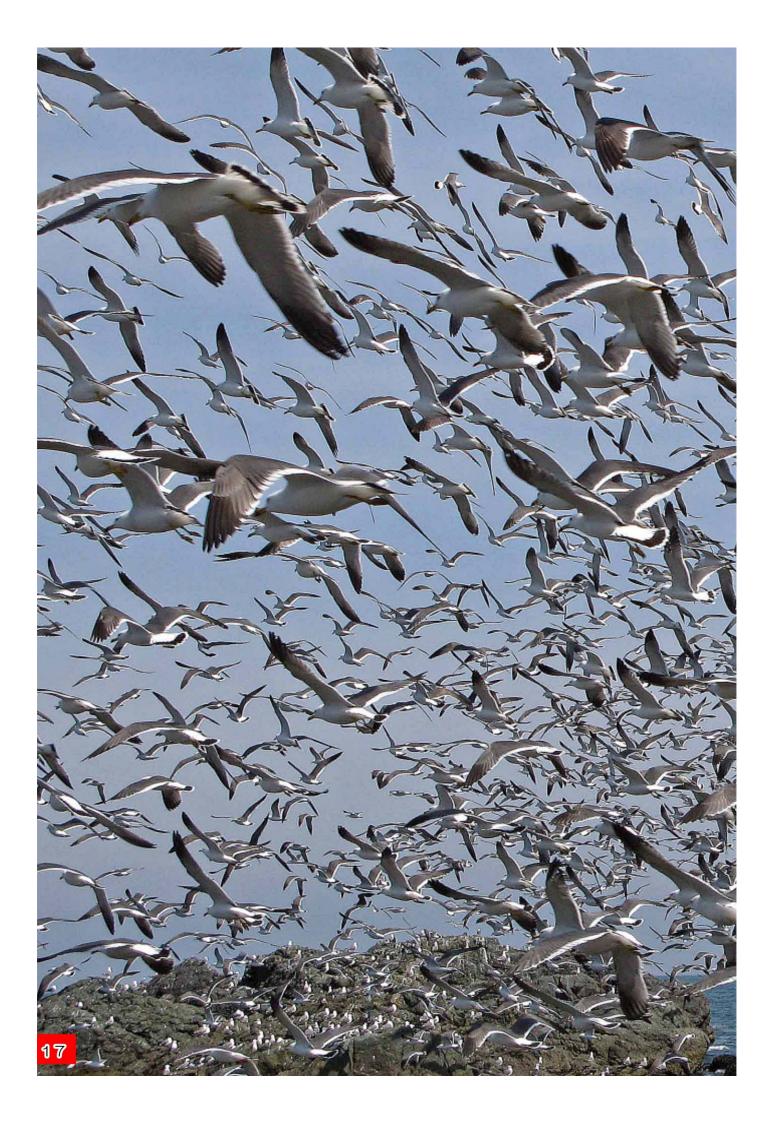


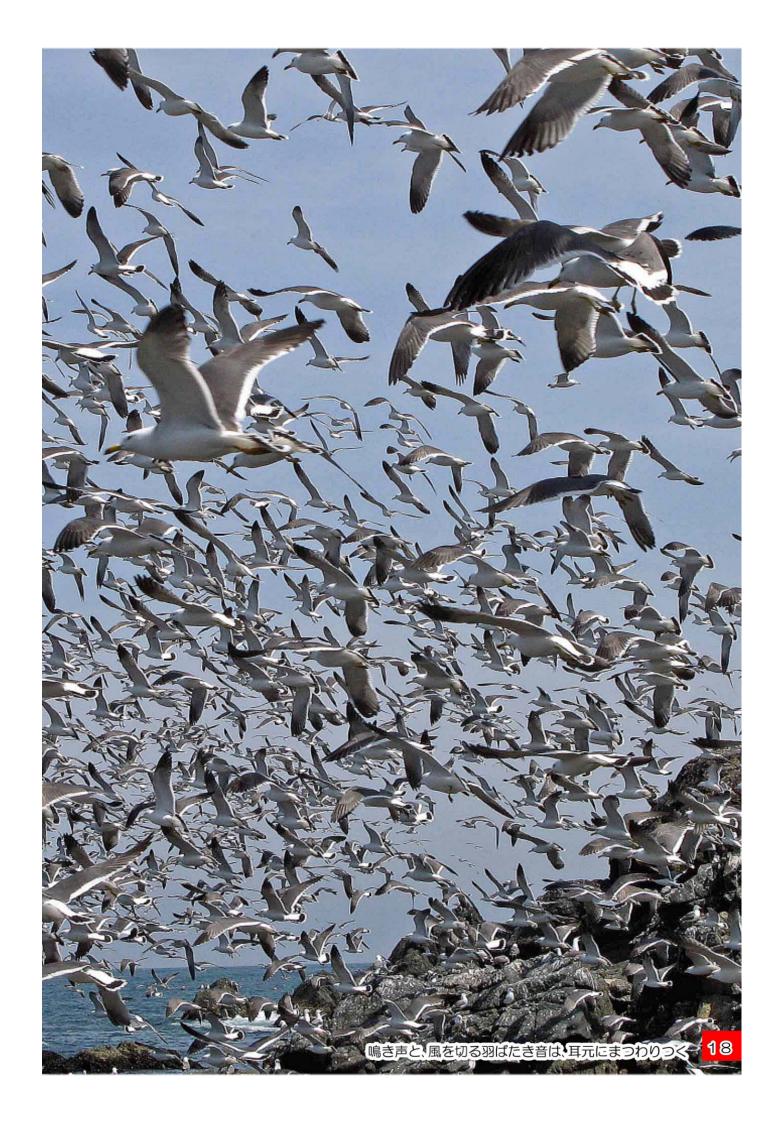










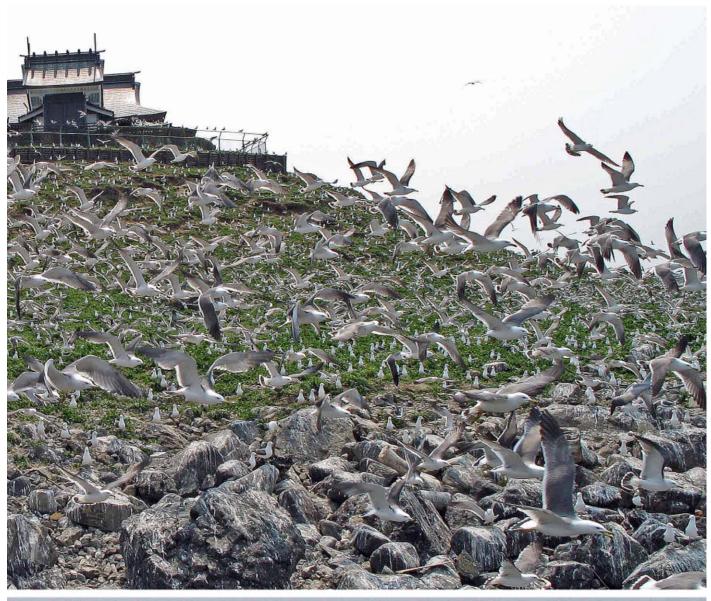




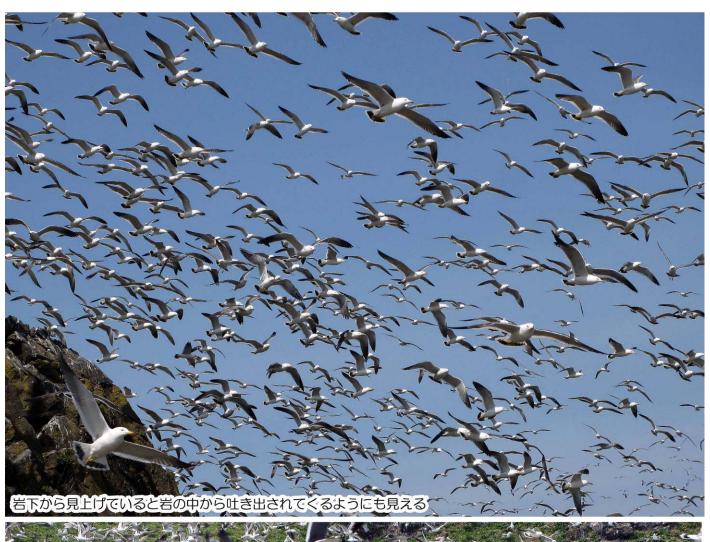














(3) 飛翔の別資料

抱卵をはじめると全体的に飛ぶことは激減する。 そして、ヒナが孵り、飼育時期の餌与え中期より、グループによる飛び方のヒナ指導に移行する。 その頃にはヒナを置いたままとか部分場所毎に、兄弟鳥や先輩鳥たちがまとまって飛翔をする。 成長中のヒナたちに飛べる素晴らしさを実際に示して、早く飛ぶように促し教育しているのである。

ヒナ教育中とヒナが自由に飛び立って島を離れて行く時の「飛翔」は別項に載せてあります

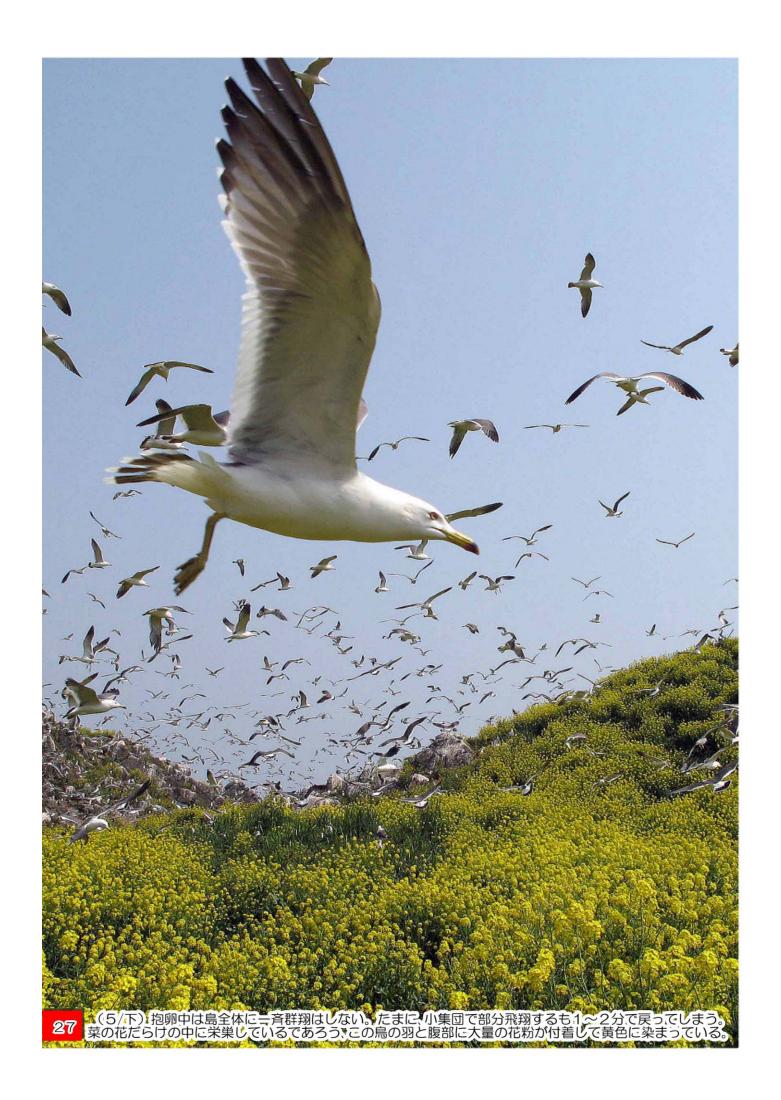


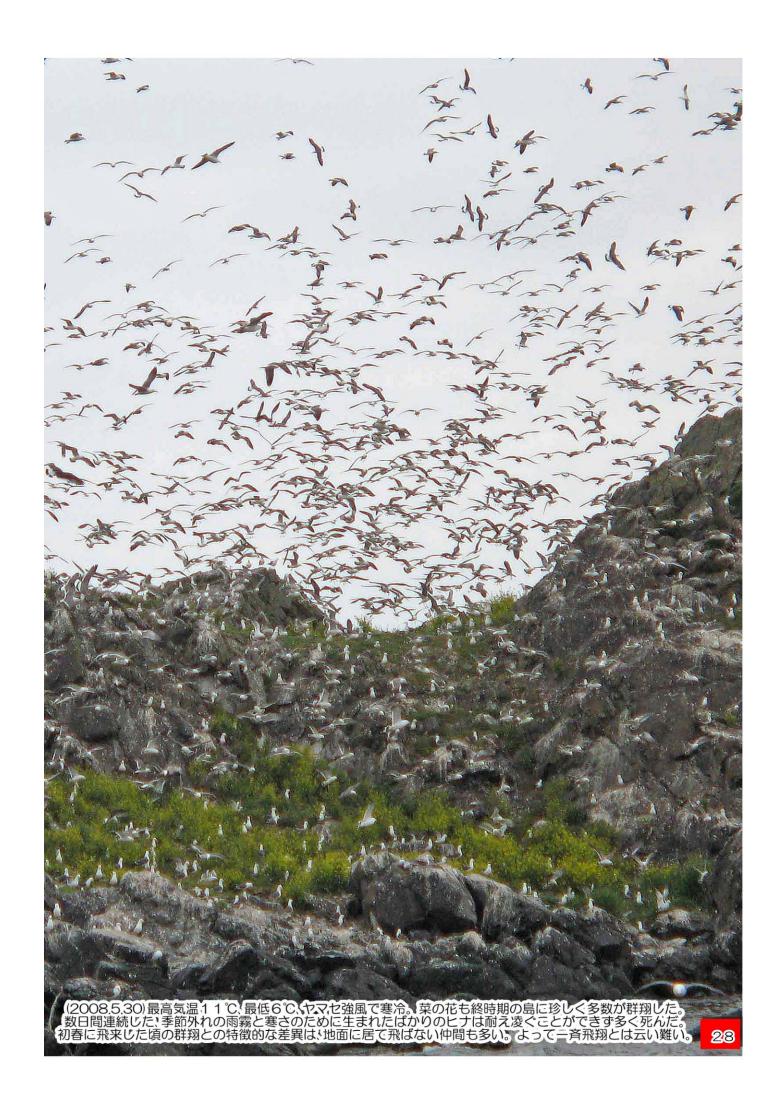












(4) 着島A(2~4月)

無島に2月下旬、飛来して4月産卵する頃までの着島の状況とようすです。 4年成鳥達はペアーを組み、数年連れ添う夫婦鳥ともども巣作り、交尾、産卵となる。 2~3月下旬までに約4万羽が来島。鳴声も響き渡り「日本音の百選」に選定されている。





↑ (2/下)第一番飛来群のあった日の蕪島。この後に雪降りあり。



(3/上) 2羽はジッとしている



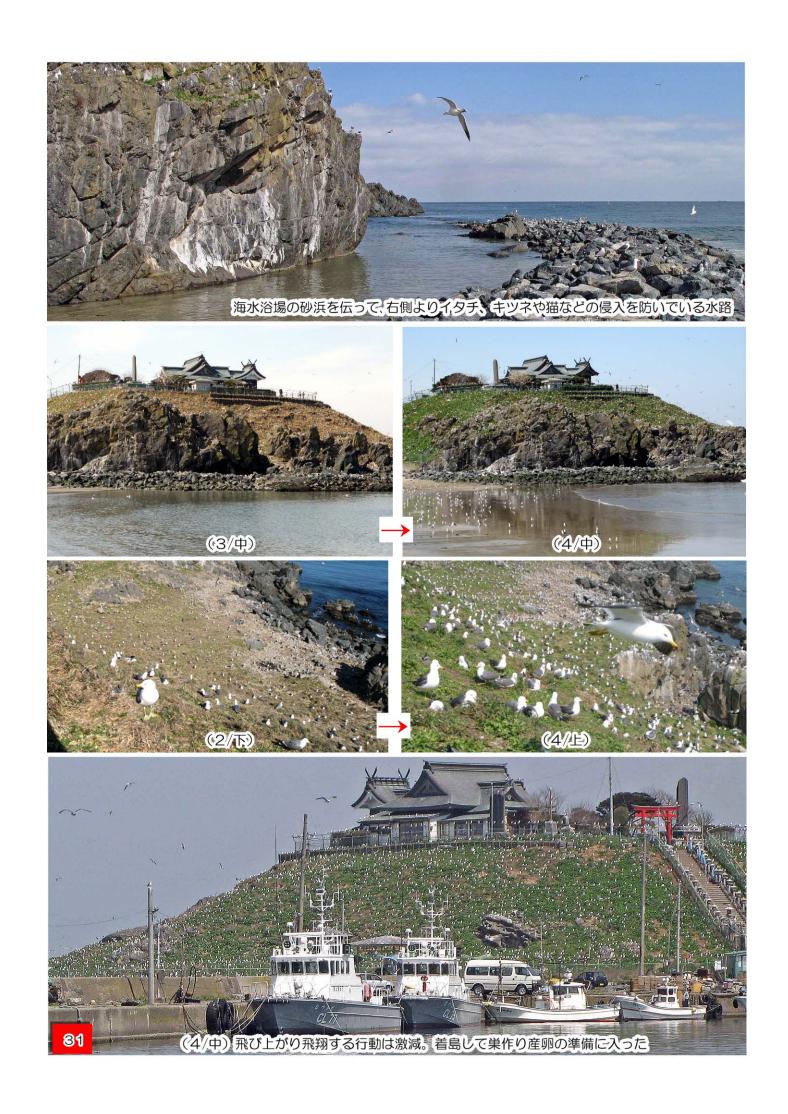
(3/中)数年連れ添っている夫婦に違いない



↑ (3/上)雪上で足元は冷たかろう



(3/中) 場所によっては残雪の長引く所がある













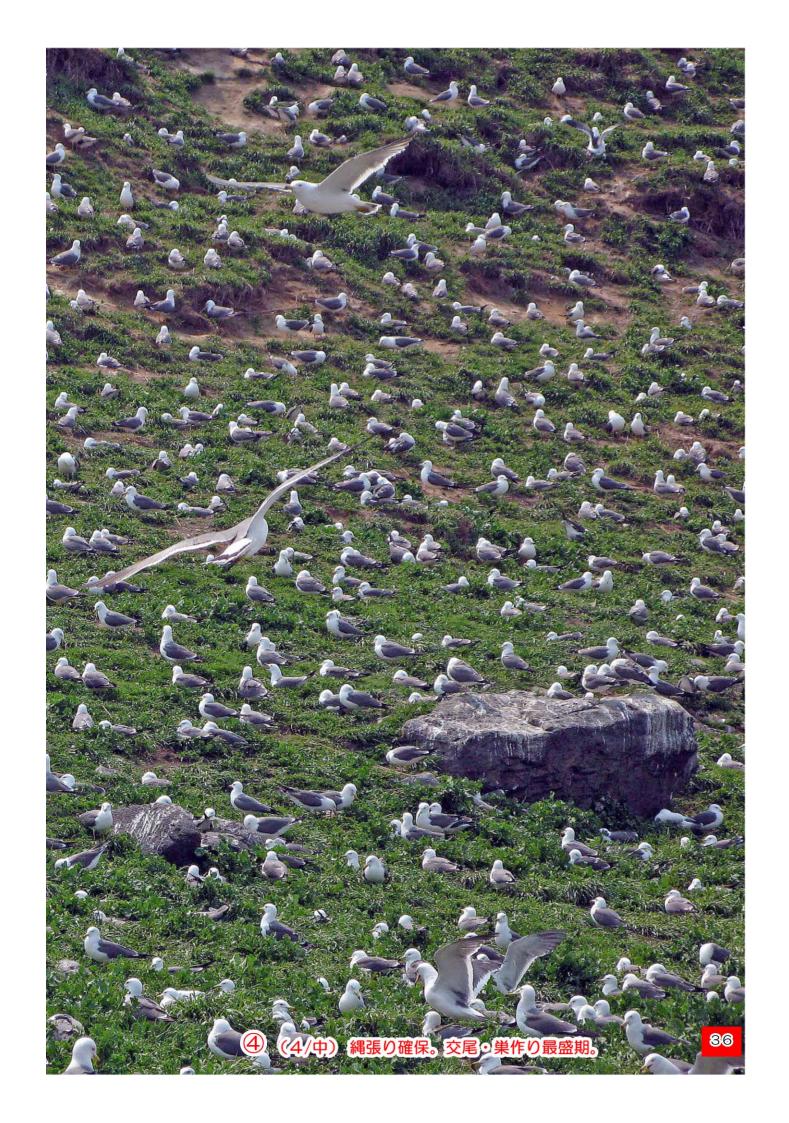






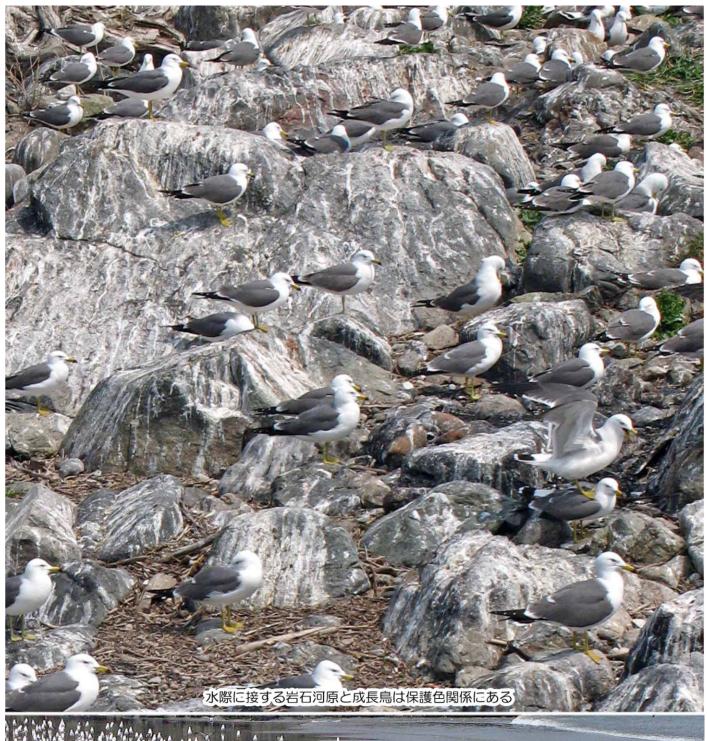






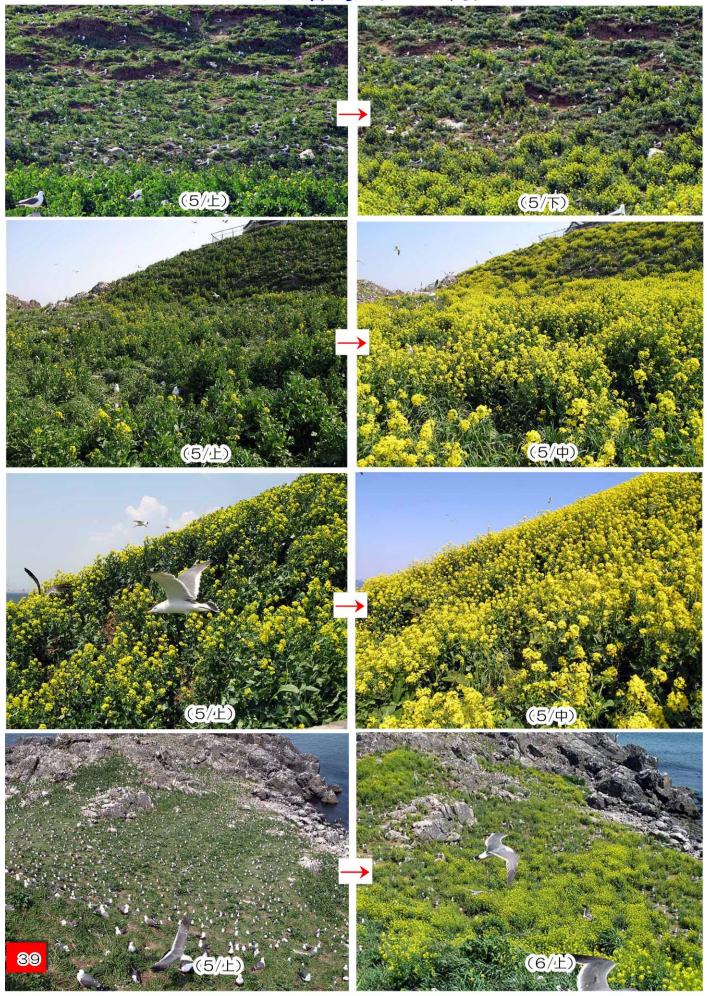






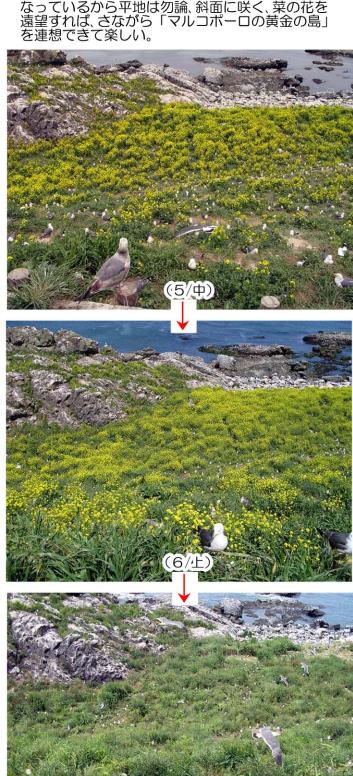


(5) 着島B(5~6月)



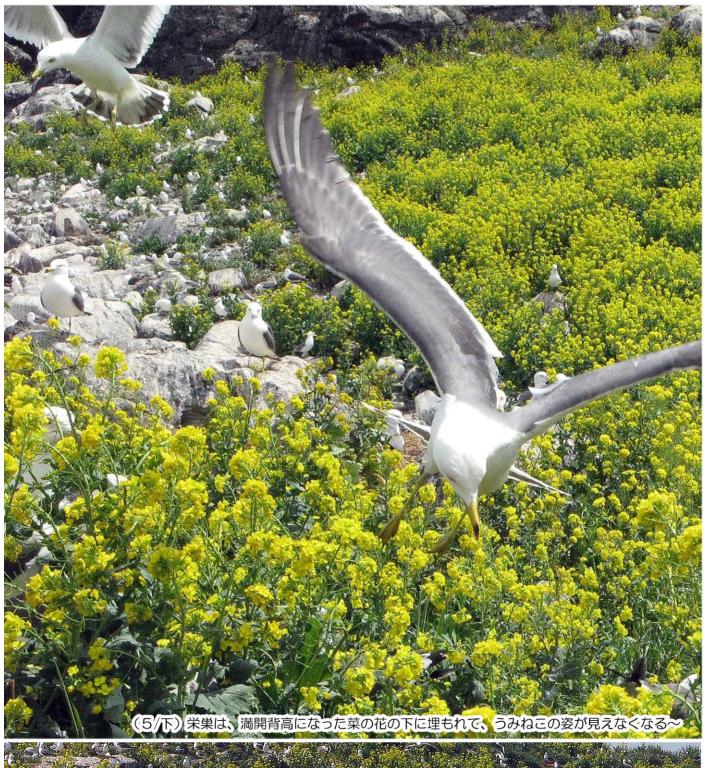


草花の生育状態は陽当りや風当たり等の諸条件の違いと、それぞれの場所により数日の違いが出る。 なお、島のほぼ中央に鎮座する神社の場所は台形になっているから平地は勿論、斜面に咲く、菜の花を遠望すれば、さながら「マルコポーロの黄金の島」を連想できて楽しい。





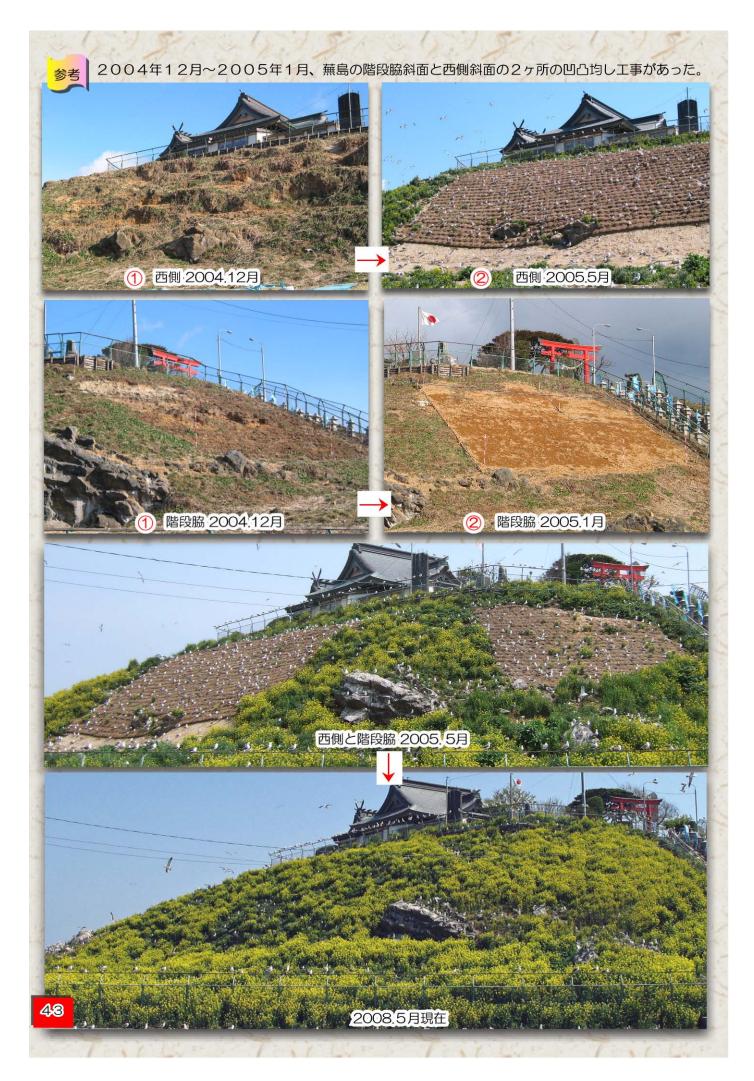
(6/下











参考

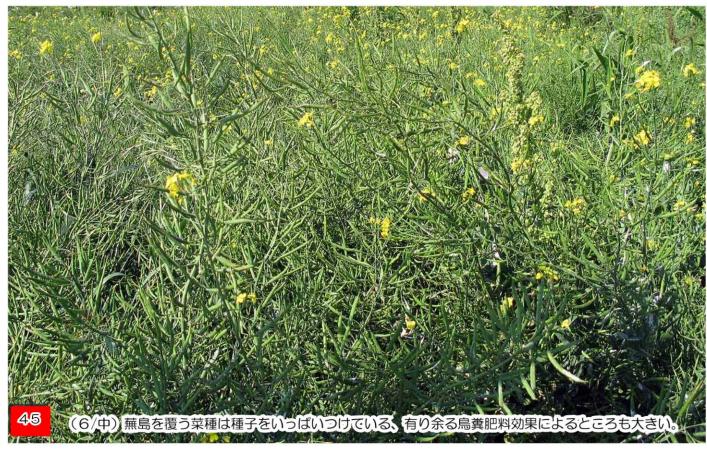
下記写真は2006年10月にあった津波並みの大高潮による現地被害である: うみねこの繁殖・子育て中だったら壊滅的な打撃をこうむったことであろう。





鳥類標識調査中(環境省から委託の山階鳥類研究所員)調査は特別資格保持者で全員ボランテアである。 鳥足に付ける輪冠は金属製で数字やローマ字が刻印されている。世界のいかなる場所を飛んでいても捕獲 されて輪冠を見られることで、誰が、どこで、何時の日に付けて放したかなどが分かるのです。





(6)闘争

着島すると、昨年の夫婦鳥の他に成長鳥のペァー組がはじまり、場所取得の縄張り闘争もある。 縄張見張りは巣を基準にして、頭部を向けている方向を警戒しているから後方よりの攻撃には弱い。 争いは想像以上に激しいものであり、生存競争の原点を垣間見ることになる。







「3大攻撃姿勢」= (1) くちばしで引っ張り合う攻撃姿勢

(2) 羽広げは脅かしの攻撃姿勢





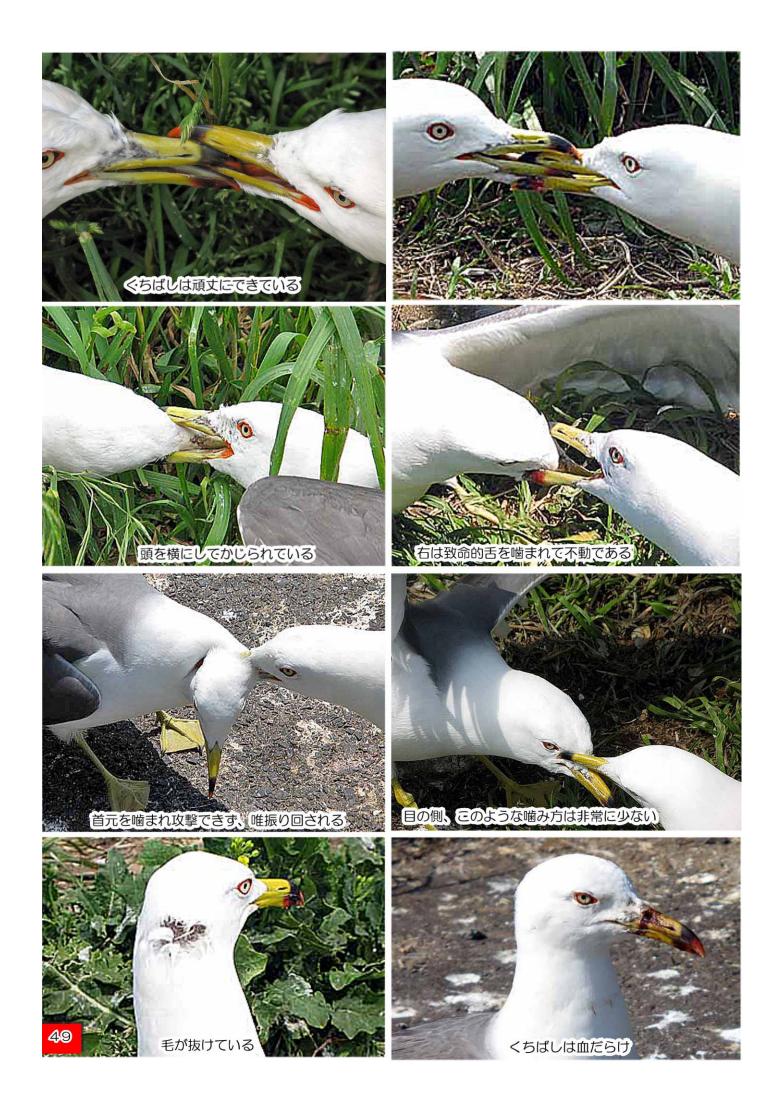


(3) 首を縮めて嘴を突き出す攻撃姿勢















↑くちばし争いから、翻るなり・・・

↑首元を噛みつけた・・・

↑噛みつけた状態を反対側から…









(7) 交尾

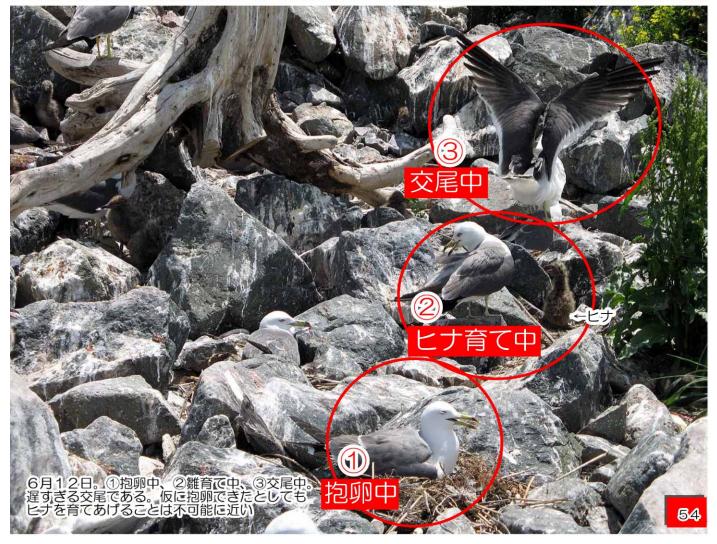
岩石、地面、岩の隙間や木の胴などに、枯木や網などの繊維屑等々を敷いて産卵の準備をしながら、 定まった相手と頻繁に交尾をする。一夫一婦制であるから戸惑いはなく、おおらかでストレートである。











(8) 営巣・抱卵

島の岩場・平地・窪み・道路面・草間などいたるところに巣をつくる。隣との巣に間隔を設けないのは仲間同士の巣が密着することでイタチ・キツネ・猫などの外敵から身を守ることが出来るのだ。尚、人の多いこの島に集中して栄巣するのは彼らの知恵で人間を恐れる外敵が侵入しない場所と知っているからで人間と共存共栄しているのだ。











(4/中) 鳴声が響き渡り賑やか

↑ (4/中) ペァーも決ってきている



(4/中) あちこちに確定ペアーが点在する



(4/中)ペアー確定。



↑ (4/中) 確定したペァーが分る



↑ (4/中) 斜面岩場に栄巣を決めた夫婦











卵は鶏と同じ大きさで60g。 設模様は緑がかった褐色で斑点模様の保護色である。孵化率は70%で2個抱卵が最大の孵化率だ。

抱卵温度は39~40℃、 抱卵期間は25~26日。

●不届きな親鳥がいて自己産みの 卵を隣の巣に入れて知らんふりを きめこむのがある。入れられた方 の親鳥は自分のものとして丁寧に 扱い差別する事なく大切に抱卵。 5個以上ある巣は入れられた卵。



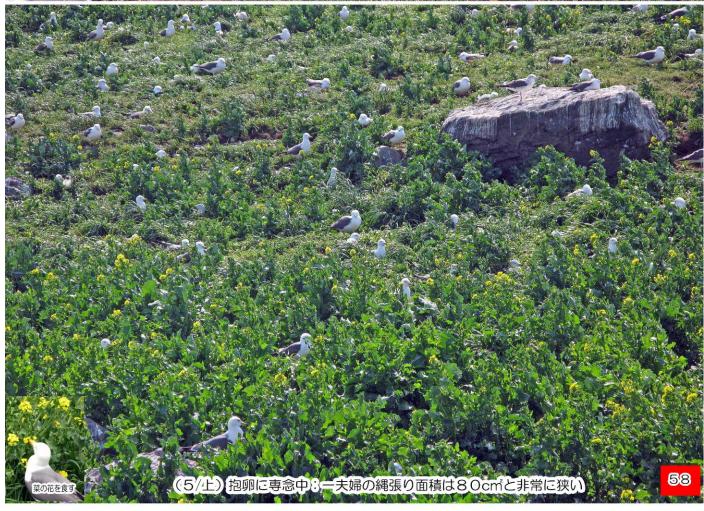














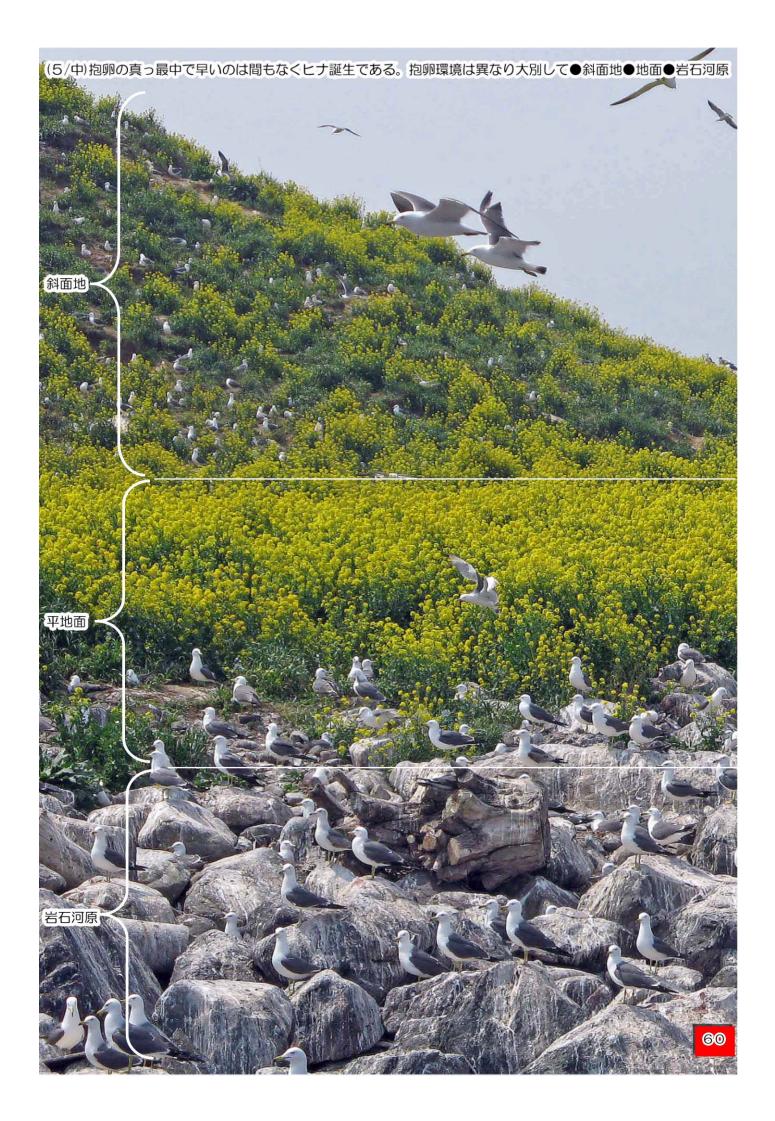
地球温暖化の影響により、ウミネコより一回り身体が大きく腕力の強い 「白カモメ」が蕪島付近をうろつくようになった。種差海岸の深久保の岩 に栄巣して抱卵、ヒナ育てをしている数個体が確認できている。

強いカモメだから、もしも蕪島に侵入して栄巣、抱卵してヒナが育ってしまえば、蕪島自体が序々に環境破壊されてゆく可能性が高くなる。

2008年4月下旬に、蕪島の一部に、一対の白カモメが陣取っているのを発見、5月30に排除された。発見時蕪島の監視員に報告した。







(9)ヒナの誕生

・夫婦が2~3時間交代で抱卵し続けて25日ほどでヒナが誕生する。誕生したヒナは卵殻の模様と全く同じ保護色である。成長は非常に早いので数日ずれて生まれた兄弟では大きさが異なることになる。 なかには抱卵し続けても孵らない卵もある。孵ったヒナ総数の1/3しか生き残ることはできない。



(5/下) 内側から突つかれた殻表面2ヶ所にひび割れ



↑ (5/下) ヒナのくちばしが出て、見える







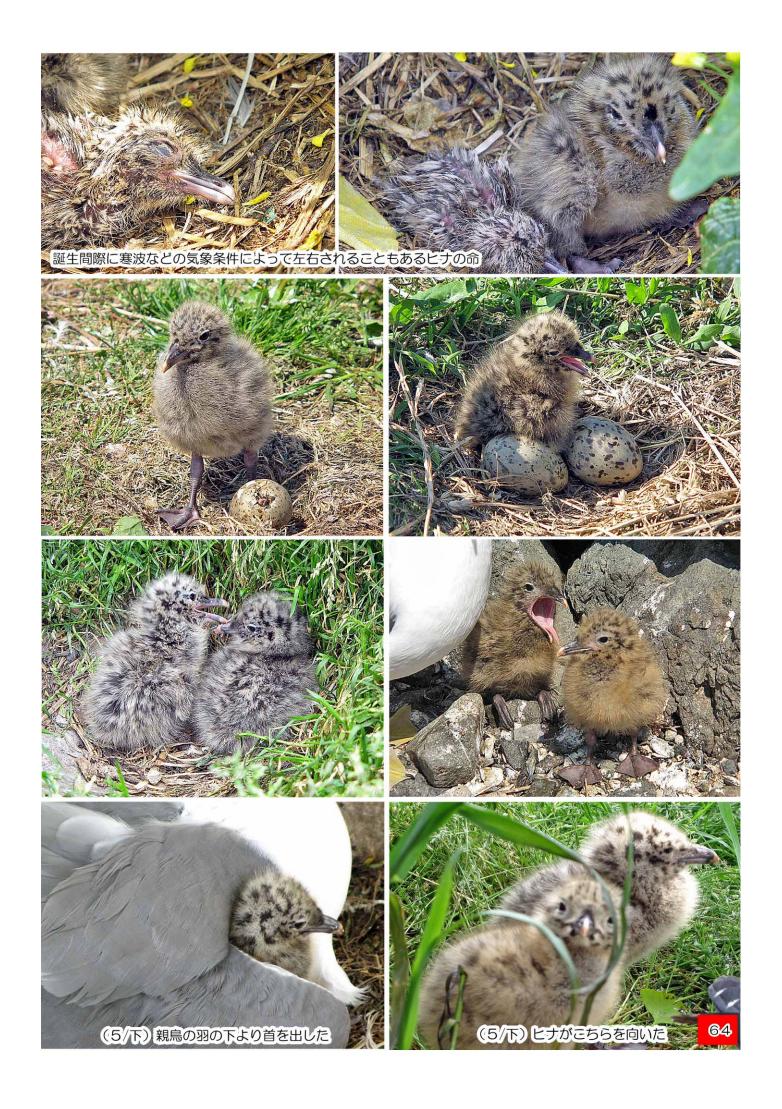
↑ (5/下) 既に誕生したヒナと卵にひび割れ発生

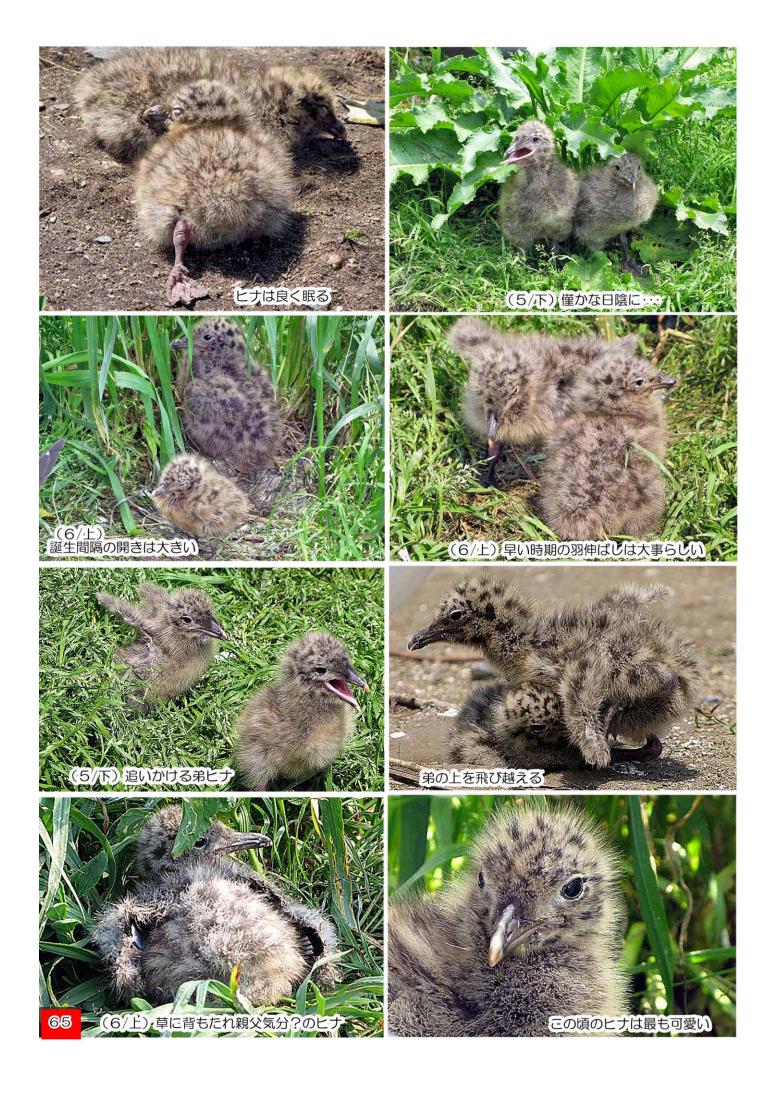


↑ (5/下) 誕生したばかりで、抜け卵殻が残る











(5/下)夫婦交互に抱卵する

ヒナは誕生しているが残る 2個の卵を抱卵している…

抱卵中の親鳥が立ち上がると左側から、別の親鳥が立ちあがった鳥の側に卵を回転させながら身体をずらし寄って来て、場所を入れ替わった。交替時間はメス・オスともに2~3時間と平等である。









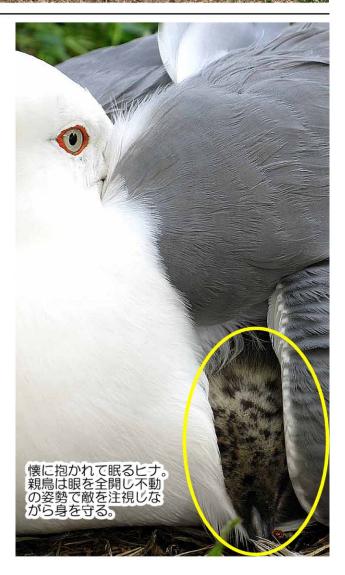
うみねこの糞が衣類に付着すると取れ難い。水性状から塗料状のものまであって、魚類の臭いがして滲みると不快である。早く水洗い除去する事。 無島の岩石が白いのは糞によるものである。

鳥類の腸は短く飛翔中はもちろん、もようすれば即、放出しなければならず何時飛散してくるか見通すことは不可能である。

放尿放糞は素早く一瞬で、終わる







(10)ヒナ虐めと死

縄張り(80c㎡)を犯したヒナは攻撃されて逃げ惑う。素早く自分の縄張り範囲に戻れれば問題はない。 互いの縄張りは連続して存在しているから複数箇所を侵すことは珍しくない。よって自分の縄張りを、 離れて広範囲に逃げ廻れば巡るほど、攻撃される回数が多くなり、当然致命傷を受けてしまう。 急所は頭部だから、狙い狙われるポイントは頭部である。攻撃をかわすことが生き延びる条件でもある。 死ぬためにではなく、真っ直ぐ生きるために、生まれてきた尊き命なのである。



↑ 三兄弟で最後に孵ったヒナは 脆弱なのか下に在って弱々しく 両足をピクピクと動かすだけだ



下になっている弱ったヒナは、 動けない。他の二羽の兄弟は 激しく動き回り、弱っている ヒナの上に乗りあがっている



↑ 親鳥が餌を持って戻ってきたら 元気な二羽は巣から飛び出た。 押し潰されたヒナは動かない。 生死は外敵だけではない。



↑ (5/下) ヒナを追い詰めてメッタ突き



ヒナはカ尽きて動かない。だがピクりと 動いたその瞬間に猛烈な突きを始める



↑ (6/中) 虐めていたヒナが側溝に 足を落として動かない。動かないと 攻撃をしないで、見守る













(6/下)

兄弟ヒナ同士の口減らし

強い兄ヒナに頭部を突かれ 逃げ惑う弟ヒナは餓死寸前

3羽誕生し2番目が3番目 を攻撃することが多い。 親鳥はそばにいても 唯、眺めているだけで 何もしない。









ヒナの頭部に傷がある。 (6/中) 親鳥は傷の手当てや慰めたりもできない。 塞ぎこんでいたヒナは、暫くしてから・・・・・・



·····毅然と立ち上がった。ヒナ自身が諦め根性を持ったら生き抜くことはできないと熟知しているのだ。



親子のコミニケーションは何かあるだろう!



鋭く尖ったくちばしは凶器そのものである。 まともに突かれたら、無傷ではいられない

縄張りを侵したヒナ

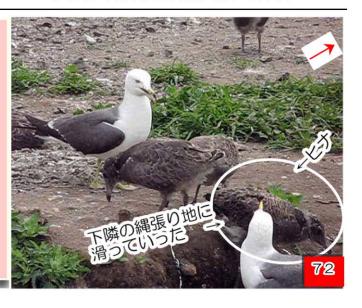
(矢印通り進んでください)

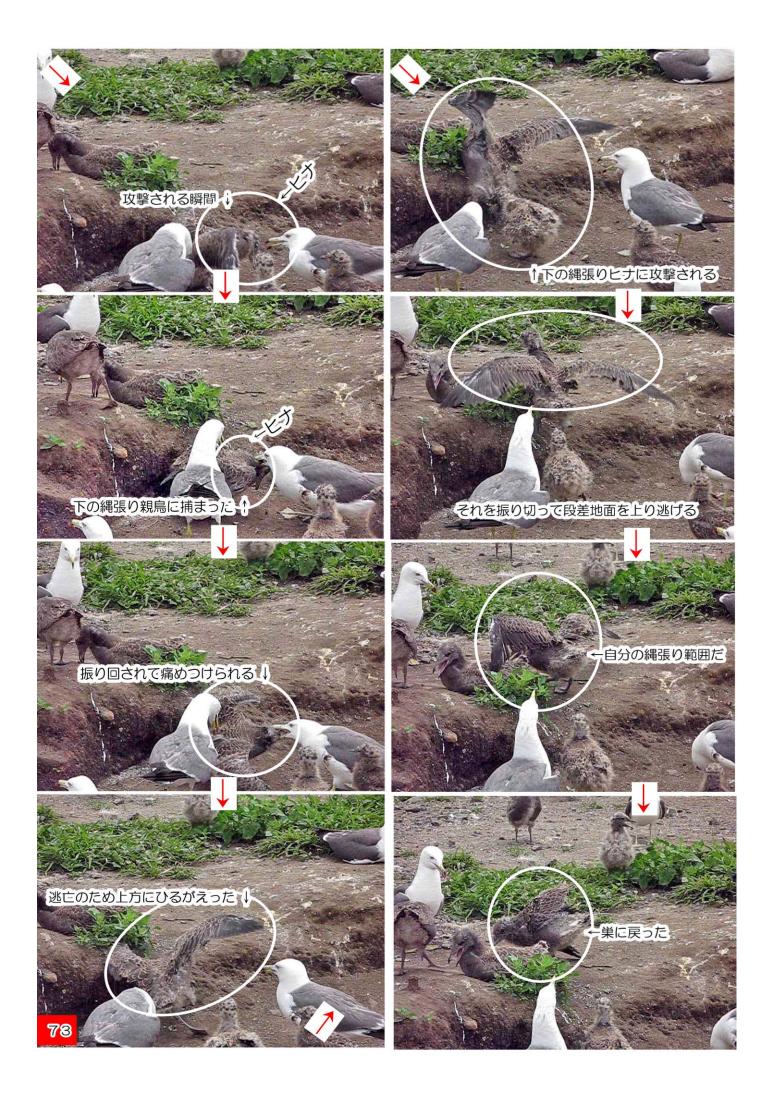
距離間のない隣の縄張りを犯して侵入したヒナの例である。

即、攻撃を受けて逃げ惑うのだが相手の攻撃を難なくかわし ほとんと傷も受けずに、元の巣に戻ることが出来た。

連続して所在する敵の縄張り地を侵して数ヶ所逃げ惑うことは珍しくない。激しい攻撃により致命傷をうけて元の巣に戻れない哀れなヒナも多数いるのだ。

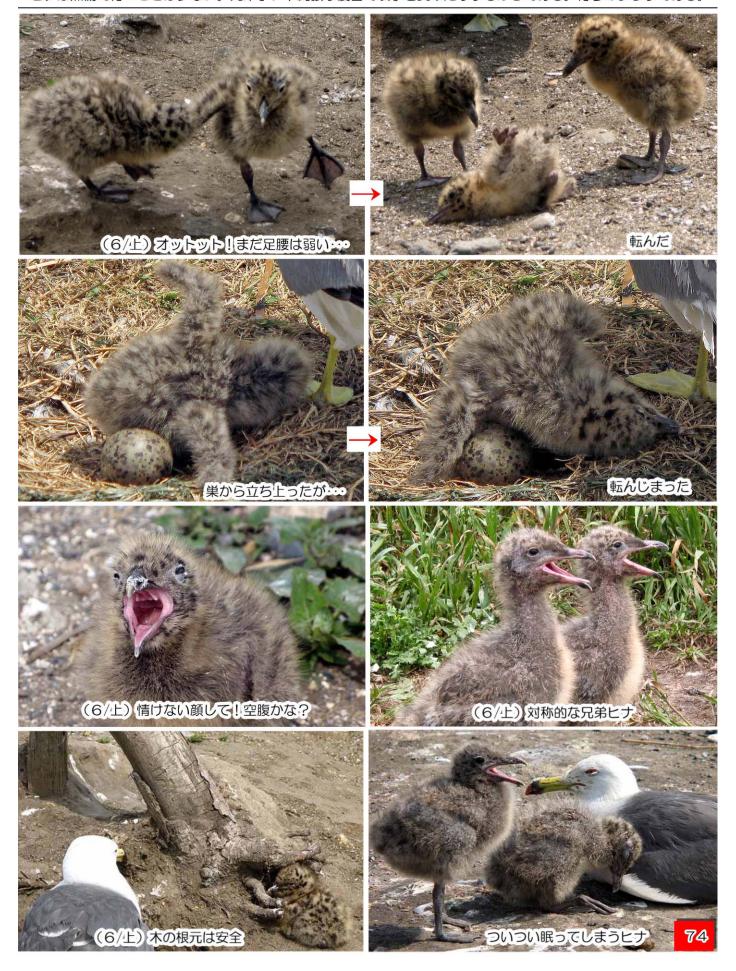
この縄張り範囲について詳細に観察を続けているが、満足なデータが未だに得られない。データは後日添付したい。





(11) ヒナの育ち

ヒナは無傷で育つことは少ない。兄弟争いや縄張り侵害で攻撃を受けたりするからである。育ちのようすである。













↑ (6/下) 親ほどに大きくなった





↑ (7/下) 自由に飛び回れるようになったヒナたち。自分の親かどうかは分らないが親鳥と並ぶ。成鳥した。



↑ (7/上) 種子のついた菜種の根元より見上げる



↑ (8/上) このヒナは旅立たず越冬するのかも?



(12)羽毛・身繕い

羽や毛の繕いはこまめに、良くやる動作である。





(13) 餌与え

ヒナは大食漢である。親鳥は引っ切り無しに餌獲りに飛び立ち、戻って来ては与えるの繰り返しだ。 生まれてから一定期間は無制限に与える。しかしある程度成長した時点から、今度は徐々に量を 減らしてゆく。そして一定の場所で与えていた餌も場所を少しずつ、ずらしながら与えるようになる。 自助努力で獲物を獲得してのみ生存できるのだ、と。早く飛び立ち巣立つことを願い指導しているのだ





(6/中)口移しで餌与え

餌を与える時、近くに他の 親鳥がいたり、狙われてい そうだと感じた場合には 餌を吐き出して丸出しの 状態では与えない。

親鳥は大きく口を開けて 餌を口移しで与える。

餌与えとしては最も安全 な方法と思われる。











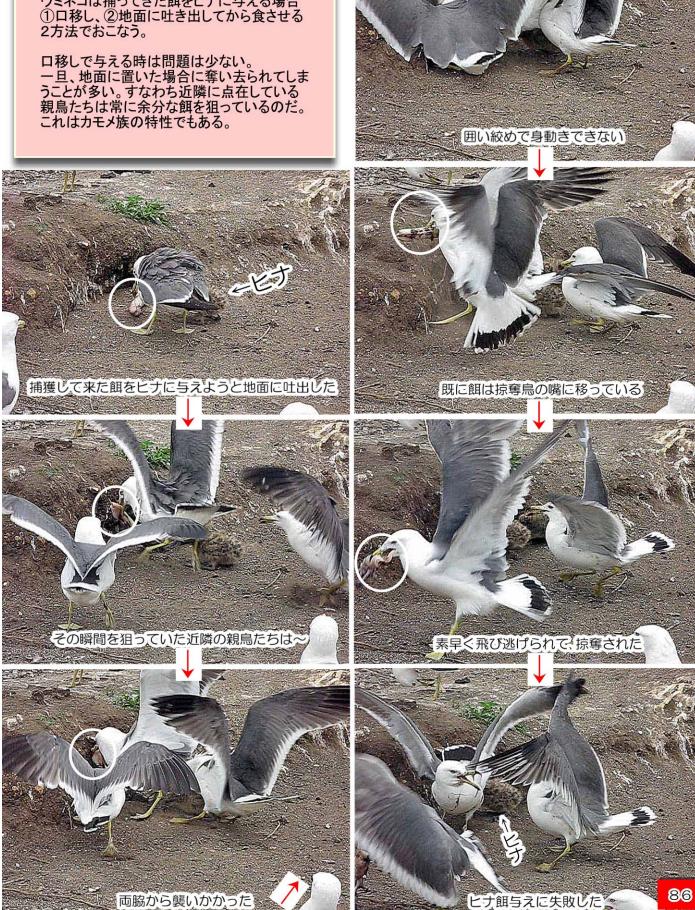






(矢印通り進んでください)

ウミネコは捕ってきた餌をヒナに与える場合①口移し、②地面に吐き出してから食させる







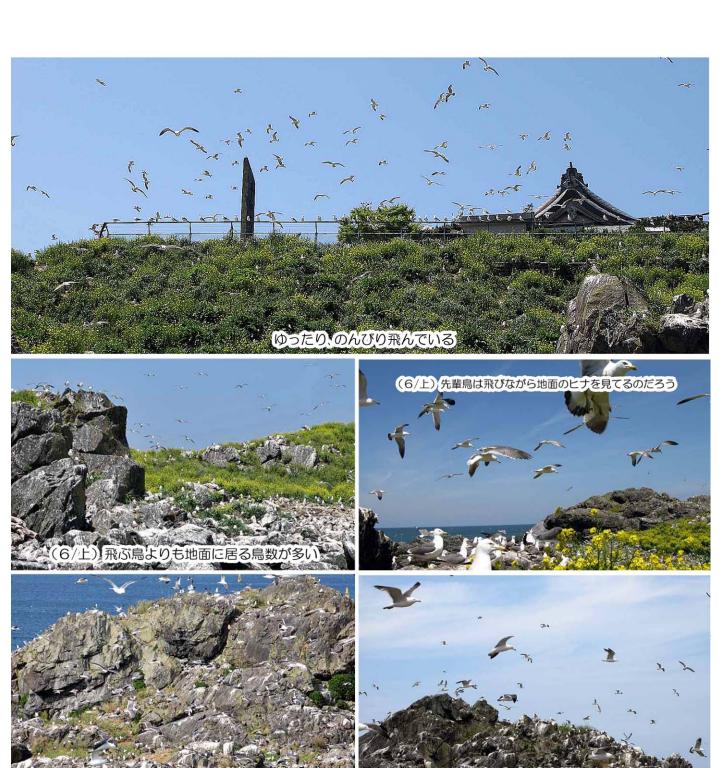
(14) 先輩鳥の指導見本飛行

ヒナが育ってきた5月中旬頃より、先輩の鳥たちは「空を自由に飛びまわれるとはこんなにも素晴らしいことだから早く飛べるようになりなさい」と促す見本飛びをグループでするようになる。 初春は全島にわたって一斉に舞い飛んでていたが、今回は先輩鳥たちが狭い範囲内で多くの グループに分かれた飛び方をする。ヒナたちは速やかに飛べるようになりたいと思うに違いない。









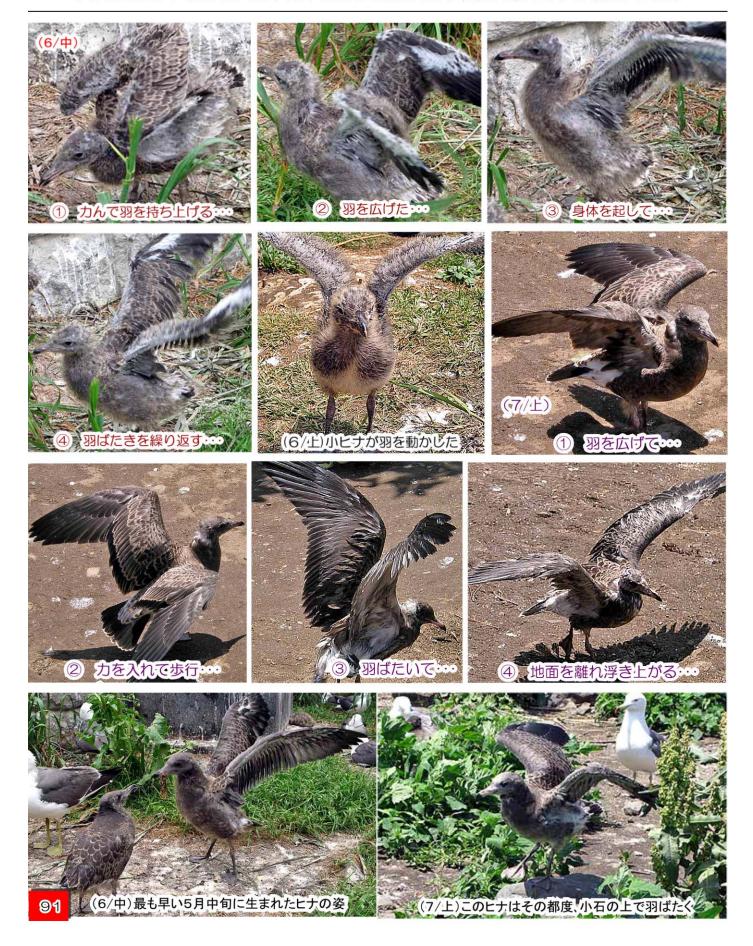






(15) ヒナの飛び訓練

ヒナが生まれてから50日ほどで飛ぶようになる。その時期になると羽ばたきの行動があちこちで見られる。 小石の上に上がって羽ばたいたり、力んで羽ばたき転倒したり、縄張りを侵したりで大賑わいとなる。

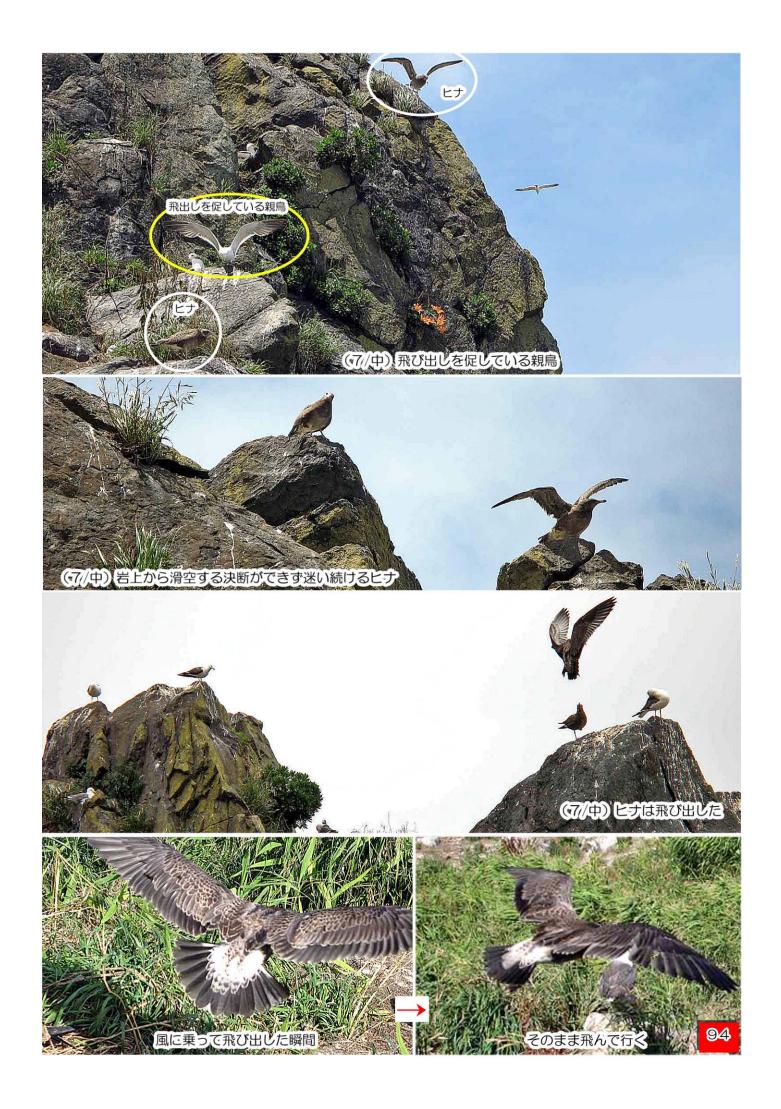












(16)ヒナの飛び姿

ヒナたちの飛び姿です。ヒナは巣を飛び立ってしまえば二度と巣には戻らない。 この飛んでいる姿は、巣立ちした証になるのだが親鳥の教育はもうひとつ残っている。 残っている最後の大切な教えは水際での諸動作であり、他の親たちと共同して教育にあたる。



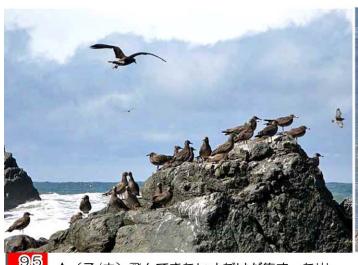
↑ (7/上~下) ヒナたちの単独飛行で自由に飛び回る



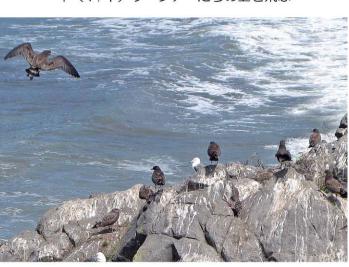
↑ (7/中) 水面スレスレに飛ぶことができる



↑ (7/中) サーファーたちの上を飛ぶ



↑ (7/中) 飛んできたヒナだけが集まった岩



↑ (7/中) 岩上にいるヒナは飛んできたもの













↑親鳥とヒナの一緒飛び↓







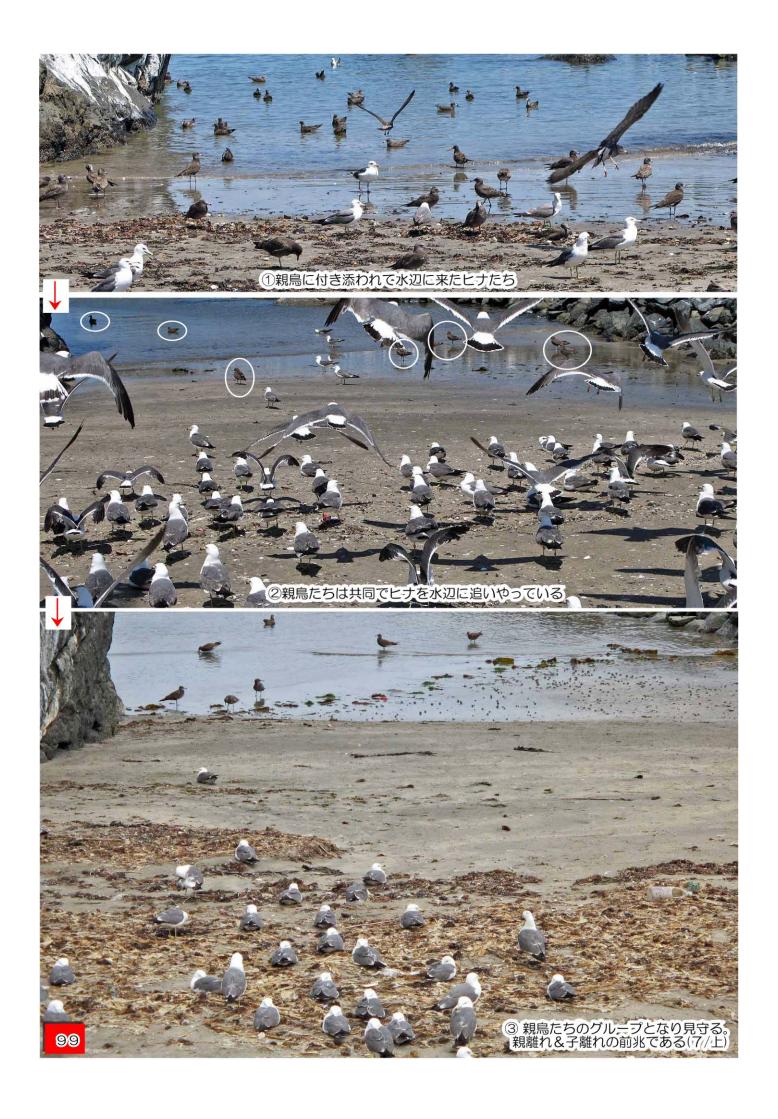




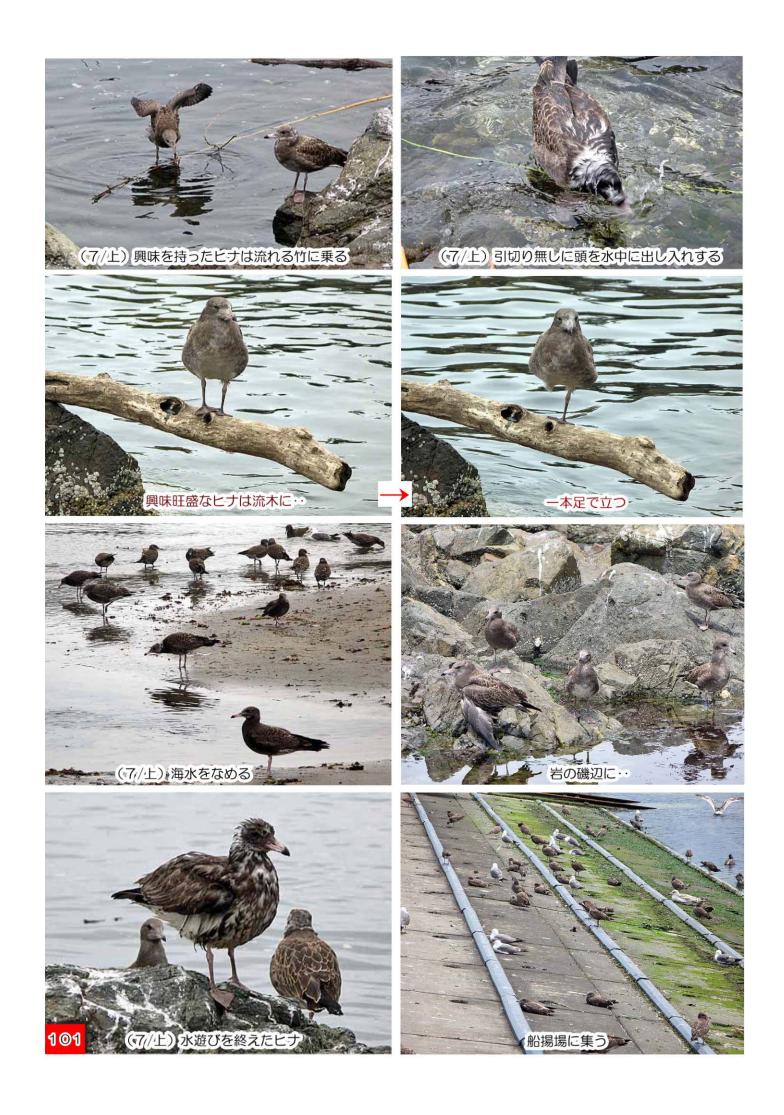
(17) ヒナの水際教育

残っている最後の大切な教えは水際での諸動作であり、他の親たちと共同して教育にあたる。 この時点まで成長できたのは産卵された数の約30%弱のみである。勝ち抜けたヒナである。 孵化し〜餌を与えられている間は自己生存だけで他は眼中になかったが、強い協力仲間意識を持つよになる。 水際における教育はヒナたち巣立ちの最終段階のもので、あと10日前後で蕪島を離れ旅立って行く。















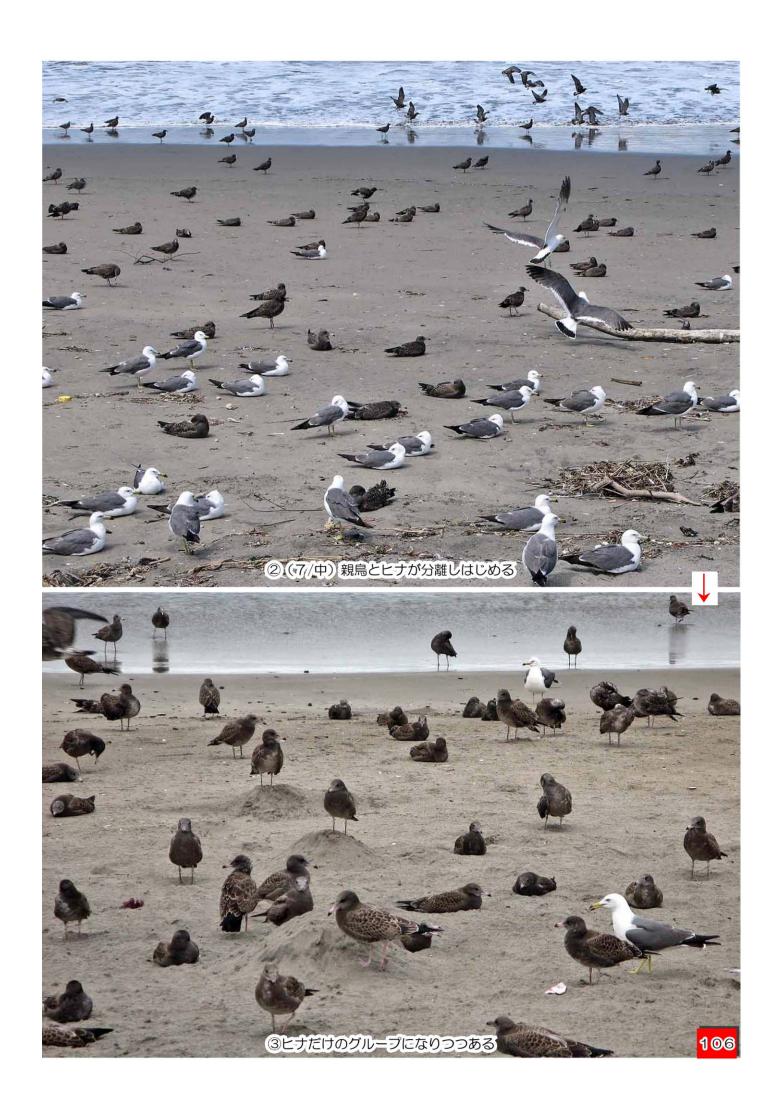










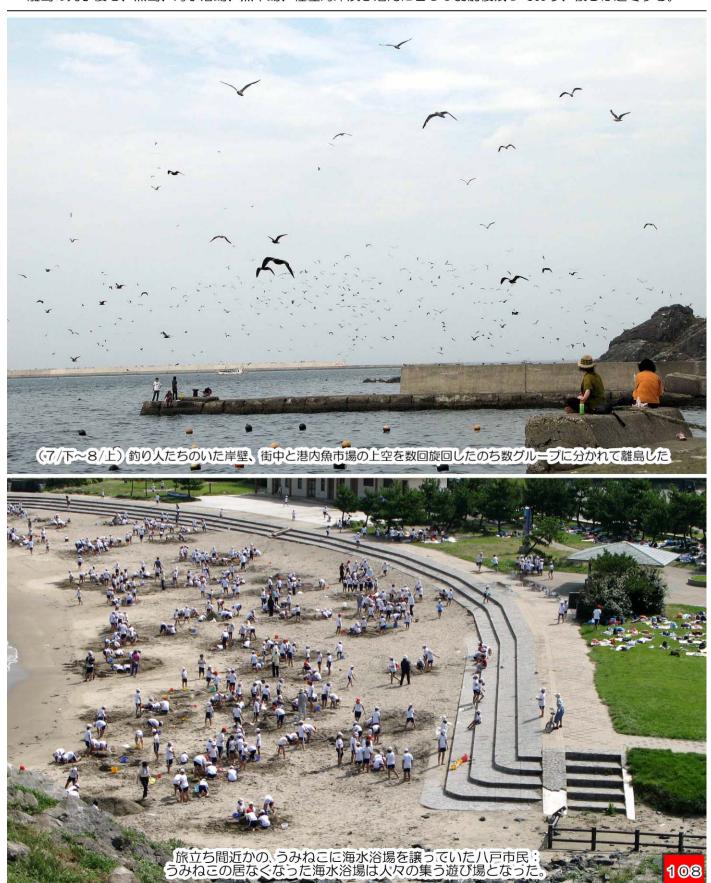


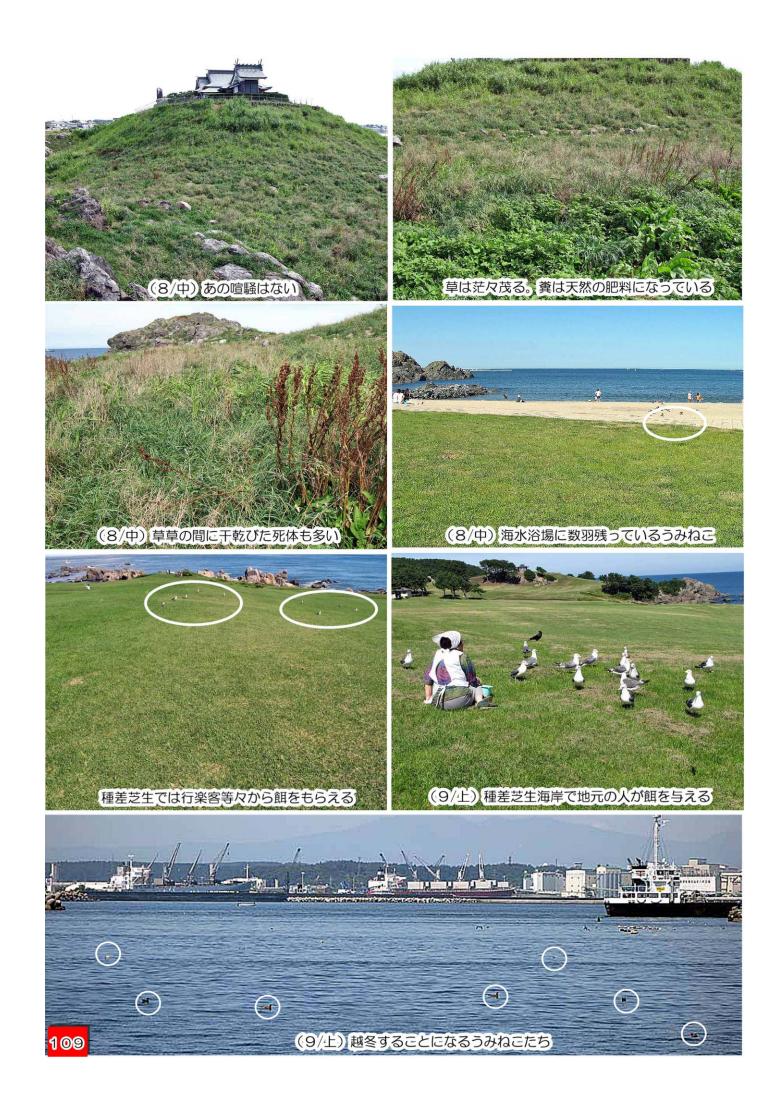




(18) 旅立ち(離島)~その後

先に親鳥だけが群れて飛び立った。その後を追いかけてヒナたちも幼鳥の集団となって旅立った。 サハリンや北海道まで8~10月頃まで北上し、寒さの厳しくなる冬季には九州や四国まで南下する。 春になると昨年飛び立った仲間の約70%が帰島すると云う。春に戻って来た4年以上経過した成鳥と 例年の夫婦鳥たちが産卵し子育てをするのである。6ヶ月間子育てし、6ヶ月間外遊となるわけである。 離島の完了後も、蕪島、海水浴場、魚市場、種差海岸及び港内に250羽前後残っており、彼らは越冬する。

















●越冬するうみねこはイカや鯖などが豊富にある秋までは過ごし易い。だが冬季の環境は非常に厳しい。





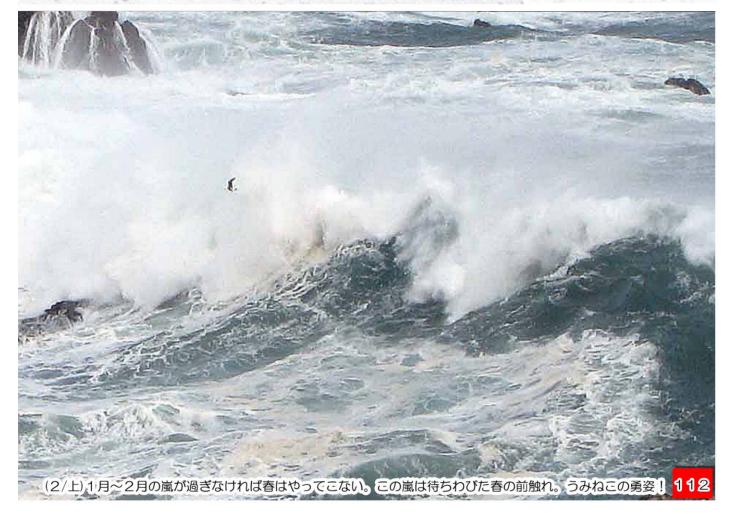












(19) その他



(7//上) 親子かな?一年鳥が縄張り内にいる

113 (6/下) 4年成鳥だが腹に残る黒毛がある

柵の上から巣作り、抱卵、ヒナ育てをしている夫婦鳥をつぶさに観察している未成鳥と独身成鳥。 近い将来自分が巣作りをする場合は草地、岩上、通路の端や木の陰などの何処が最も自分に適しているか? 恋の仕方、餌の与え方などを、このような具合で成鳥するまで観察し勉強をしているのである。 ヒナ育てをしていないチョンガー族たちは、飛び方の訓練時などに集団の一員として力を発揮して協力する。













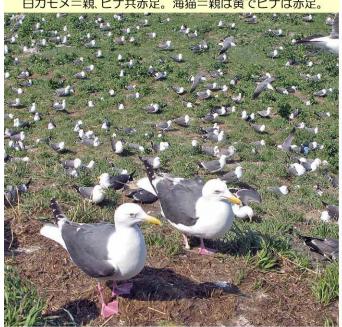


59頁参照

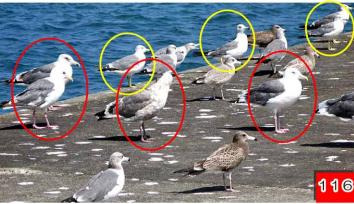
「白カモメ」のこと:

うみねこより強く大型の白カモメは温暖化の影響により 蕪島内に栄巣を試みている事実あり。深久保海岸では栄 巣抱卵してヒナが誕生している。また港内の岸壁に他地 域より移動してきたグループもみかける。

白カモメ=親、ヒナ共赤足。海猫=親は黄でヒナは赤足。

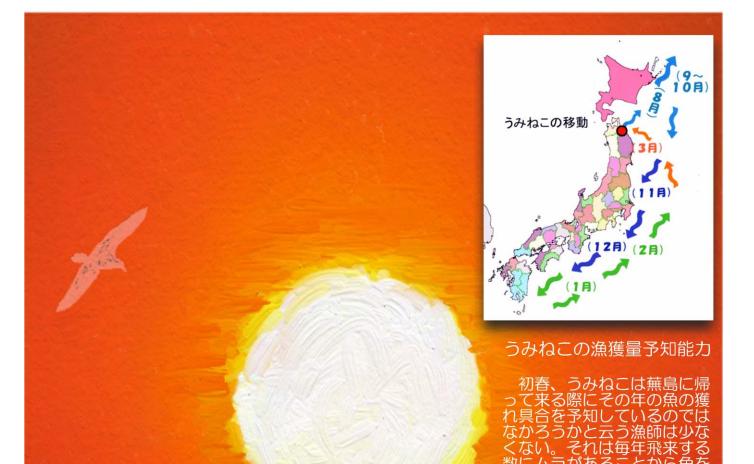












国指定文化財 天然記念物無島ウミネコ繁殖地 (大正11年3月8日指定)

ウミネコは東アジアの沿岸を生息地とするカモメ科の海鳥で、この無島には繁殖を目的として2月下旬に 着島し、4月下旬から産卵が始まり、約1か月間でふ化します。7月下旬に島を飛びたって行きますが、近年 はこの無島に越冬するウミネコも見られます。繁殖期間には、島はウミネコの別天地となり、その数は4万 羽ぐらいと言われていまずる

ウミネコの繁殖地は、離島など人里離れたところが多く、無島のように市街地にあるのは非常に珍しいも のです。また、ウミネコが魚群の所在をしめしてくれることから、ここの巌島神社にまつっている弁財天の 使いとして漁師たちに大切にされてきました。いわば水産八戸のシンボルでもあります。

昭和62年10月

八户市教育委員会

にムラがあることから魚を 得できる量を予測 して れに合わせた羽数が割り当 られているのかも知れない、

と云うのである。

A DESIGNATED JAPANESE CULTURAL PROPERTY SINCE MARCH 8, 1922

KABU ISLAND: A BREEDING GROUND FOR BLACK-TAILED GULLS (NATURAL MONUMENT)

Black-tailed gulls (Larus crassirostris) are seabirds of the subfamily Larinae, related to terns and skimmers. They live on the coast of East Asia, but every in year February, the birds fly to KABU ISLAND to breed. Until they leave in July, the island is truly a black-tailed gull heaven, since the local bird population swells to about 40,000.

Most of the breeding grounds for black-tailed gulls are remote places or solitary islands. KABU ISLAND, on the other hand, is rather close to the city, so is therefore quite a rarity.

The black-tailed gulls often gather over large schools of fish. The fishermen use this information to locate the fish. They protect the black-tailed gulls as "messengers of good luck." On the top of KABU ISLAND is Itsukushima Shrine. The shrine is dedicated to Benzaiten, the Indian Goddess of good luck. Benzaiten is symbolic of the black-tailed gulls and the good fortune they bring.

OCTOBER 1987



本冊子は、下記URLからダウンロードできます http://kabushima.com



テック・ブレインズ 〒031-0073 青森県八戸市売市鴨ヶ池48-12 TEL: 0178-20-7133 MAIL: info@tekbrains.jp URL: http://www.tekbrains.jp 代表者: 三浦 孝之